

陽気だより

養徳社 検索

ホームページからご覧いただけます

No.33 2009.12.15

第4号(24年8月号)から

『陽気』は、昭和24年4月の創刊、今年はその60年の年です。過去の記事から、その歩みの一端を振り返っていきます。

エンタツ 君、妙なことを訊く

ア けど、夫婦喧嘩したことあるか？

アチャコ おい、言葉に気を

つけない。かとは何や、かとは？

ア だって、かと言うのは人を軽蔑した訊き方や。傲慢やないが、僕は今日まで夫婦喧嘩だけは――

ア いいや、毎日、欠かしたことがない。

ア それやったら、何も憤慨することないやないか。

ア してないと思われたのが残念で、一日三回食後には用

工 そんな阿呆な、葉を飲んでる見たいに言うな。

ア 嘘やと思ふなら見に来い。近所の評判で、みなとても僕

工 へえ、楽しみに？

ア そうや。今朝も僕の顔を見るなり皆の一番の挨拶が、

工 昨夜はどっちが勝ちました？

ア まるで野球の試合やがな

工 で、そんな喧嘩の原因は一体

何や？

ア 昨夜のきつかけは、僕が明日は雨やと言うたら、女房

が西の空が赤うないから雨と



のふんどしがえらい湿ってたんや。

工 よう言わんわ。

ア それが喧嘩のそもそもの発端で、明日の天気より我が家の雲行きの方が先に雨風になつて仕舞うた。

工 でも、そんな頼りない事で、よう喧嘩ばかり出来る

な。

ア いや、原因は何でも好いのや。女房の顔を見てると何や面白うなくなつて、喧嘩せずには居られん様になつて来る。

工 じゃ、何でそんな奥さんと一緒に結婚したのや？

ア ところが、結婚した時はそうやなかった。

工 と言うこと？

ア 今でも憶えているが、結婚式の時は嬉しうて嬉しうて仕様がなかった。

工 その筈で、神さまの仲立ちによつて夫婦にさして戴く、三三九度は芽出たい固めの盃。

ア その時、思わず見交した互いの嬉しい顔と顔。彼女の眼が二つ、僕の眼が二つ合せ

工 それ、嫁入りやがな。

(後略)

変り種ナンバーワン比べ

運賃値上げの折から、タダ乗りのNO1を紹介しよう。と言って、その人は決してタダのサツマノカミ常習者ではない。とくに名を匿(かく)しておくが、有名な女奇術師である。その女奇術師が、なぜ、タダ乗りのような、ミミッチイ真似をするのか、彼女自身の言葉を書くことにしよう。

「由来、手品と申しますものは、人を騙すものでございます。……つまり、人の心理を、たくみに、自分の思うように操る、一種の催眠術にかけてしまうことが必要なのでございます。そのために、私は、修業中、師匠から、汽車や電車に無賃乗車をして決して見破られぬように修業してみよと教えられました。

たとえば、改札口を通るとき、コソコソ人にかくれて通つたり、逃げるように通つたりするのはなく、堂々と、切符も何も持たずに通るのでございます。そんなとき、自分が切符を持っているという自信さえ、充分に持っている、堂々と通つても、決して、あやしまれません。それで見咎められるようではダメなのでございます。また二等車へ、三等の切符で、堂々と乗り込みます。途中で検札がまいります。そんなときも、平気で三等の赤い切符を車掌さんに差出して見せるのでございます。こちらに、一点の心のやましさがないと、つまり、それだけの修業ができてないと、決して相手もそれが赤切符とは気づきません。まあ一番やさしい手品の一種でございますしょうね。ホホホホ、」

御本席のお正月の一日

昭和二十六年「陽気」一月号
「御本席のお正月の一日」

(橋本正治)より

(御本席様は)小皿に盛られた塩を手先につけて、グルグルと歯をこすって、うがひされるかと思えると、もう洗面がすんでいる。生涯菌ブラシ、はみがき、石鹸など、お用いにならなかつた本席の洗面は、至極簡単なものである。(略)

少しやせ気味ではあるが、瘦躯鶴(うすくわ)のようなでもない。普通日本人の標準型体格である。七十近いのに腰もしゃんとしてをられる。頭髮は少なく、前頭部ははげてはいるが、白髪が目立つほどでもない。(略)

いつて漆黒でもない。(略) 午後は御参拝である。(略)

当番の本部長と、青年とおともで、袴もお扇子ももた

ず、いつもの通りにおでかけになる。まづ本部詰所へあがりになってから、親神様かんろ台の御拝である。

平手をついてしみじみと拝をなさる事約三十分。その間御黙禱である。まのあたり親



神様とお話をなさっているように見える。(略)

丁重を極めた御拝がすむと、教祖殿へおいでになる。ここでは、御休息所の下段八畳の上よりで、普通短いときで優

に三十分は、拝をされるのである。別に言葉に出して仰つたり、形に受け応えしていられる様な所は見えないが、「席をひき寄せ相談する、日日まぢかねているのや」という意味のお指図もあつて、全く御存命の教祖様が、まぢかねて本席とお話をかはされるのであらう。今日は正月とて一きわいつもより長時間の御拝である。(略)

こうして御参拝と言えは、優に三時間ばかりかられるのであつて、雨が降つても風が荒れても、かかされることがない。全く朝起きてから、夜おやすみまで、祈りにあけて祈りにくれる御日常であつた。(後略)

※本記事末に、「本稿は、明治三六、七年ごろの正月で、当本席に青年として仕えておられた清水由松先生からの聞き・校閲」と付記されています。

北海道に血と汗と涙を流した伝道の記録

大地を駆ける伝道者たち

初の地域限定おたすけ実録集

天理教北海道教務支庁編
頁数・価格未定

図書出版 養徳社
天理市川原城町388
☎(0743)62-4503
http://yotokusha.com

「陽気」創刊60年記念出版

人生二終なし

じんせいにおわりなし

—父 柏木庫治を語る—

- 三人の兄妹によるてい談
- 「陽気」掲載記事
- 柏木庫治小伝

定価=1,260円(税込) 送料200円

「陽気」創刊60年記念出版

道の八十年

—松村吉太郎自伝—
天理教の歴史とともに
生き抜いた信仰軌跡

松村吉太郎 著 定価=1,680円(税込)
(高安大教会初代会長) 送料200円

「陽気」創刊60年記念出版

お道の人のおとておきの話

お道の人のお美しい心象風景 52話

朝席・夕席に最適です

定価=1,260円(税込) 送料200円

養徳社 よもやま話

○……「陽気」創刊六十年の年も暮れようとしています。おかげさまで記念講演も道柳のつどいも無事に終えることができました。来年もよろしくお願いいたします。来年の合言葉は、「読んでますか陽気」です。

○……いよいよ自分のホームページ、ブログをつくることに挑戦し始めた。「そんなことわからんの」などという家族の罵倒? に耐え切れず、一度は断念したのだが、七十歳近い信者さんがやり始めたという奮起することにした。すると、思いがけず、本部に勤務する次男が、丁寧につくり私にわかるよう教えてくれるようになった。あー、ありがたい。近々何かおいしいものを食べに連れて行ってやる。単純な父親なのである。

広告を載せませんか

ようぼくの企業や会社の広告を『陽気』誌へ載せてみませんか? 料金は、記事中で一回二万円から。

詳しくは養徳社広告係まで
☎0743・62・4503

この「陽気だより」を各支部例会などの折、広く養徳社からのお知らせとしてご利用ください。ますよう、お願い申し上げます。

養徳社